

エッセイ

― 日々を楽ししく ―

# エッセイ 三題

上野 一彦

## ダック・コール

歳をとると無駄な回り道をしなくなるものらしい。

「れんげ菜の花この世の旅もあと少し」（時実新子）

となれば、省エネこそ真の美德である。推理小説家を目指していると言言する友人がいる。私なんぞ、

「小説を書こうとしたは五度六度」（榎本紋太）

の川柳を知って以来、小説家になるといふ若い頃からの夢はとんと口にしなくなったが。

しかし、友人はその夢やみがたく、古今東西、名推理小説をその定着した評判を頼りに読み漁っている。いつの日

か華々しくデビューする日を夢見つつ。最少時間で最大の効果を狙っている。その上、私のような中途半端な仲間も巻き込み、感想を求めてくる。ゴキブリ風乱読者の私にとってはそれもまた貴重な情報源ではある。

彼から稲見一良という、今はもう故人となった作家の『ダック・コール』なる作品を脅迫的に薦められた。年譜によれば、稲見一良（いなみいつら）は、小説家であり放送作家。記録映画のマネージメントを務める傍ら、一九六八年文芸誌の新人賞に入選、しかし多忙のため作家活動には専念しなかった。一九八五年肝臓癌の手術を受けるが全摘ができないと分かると、生きた証として小説家活動に打

ち込むと周囲に宣言し、一九八九年、本格的に小説家デビュー。一九九一年、『ダック・コール』で数々の賞を受賞し期待されるも、一九九四年、わずかに九冊を残して癌のため没したとある。なんと劇的ではないか。

小説家になりたいと嘯きながら、一介の雑文書きで終わりそうな気配濃厚の私にしてみれば、極めて小癪な存在である。だいたいがへそ曲がりの私は、人の薦めた本でよいと思うものは限りなく少ない。

しかし、一良はちがった。稲見一良は、まさに日本のヘミングウェイであった。故人だし作品も少ないので、私としては珍しく、あつという間に読み終わってしまうのが惜しく、ていねいに読みふけた。ワイルドライフを趣味とするハードボイルド推理小説であるが、銃器マニアックなものとはまったく違う。少年の視点や視線を取り込んだ人間臭さは限りなく温かい。

中級のバードウォッチャーでもある私にとって、キンクロハジロ、カイツブリ、ヒドリガモ、見慣れた名前がバリバリ出てくるのもたまらなかった。確かに第二次世界大戦など、時代性を感じさせる作品もあるが、ここに収録される短編はどれも好ましかった。

好きな作家は年代順に読んでみたくなる性癖のある私に

とって、その活動時期が短く、全作品を手にとることが容易な作家はありがたい。『男は旗』『花見川のハック』『ソー・ザップ！』『ダブルオー・バック』・・・と、インターネット・アマゾンに発注し、集中的に彼の四年間の作家生活を共有することができた。

どの話もそれぞれ感性的には気に入ったが、やはり、『ダック・コール』『セントメリーのリボン』『猟犬探偵』が私にとってのベストスリーだった。男の本であることは間違いないが、アウトドアの料理本でもある。パリッと皮の焼けたジャガイモ、仕留めたカモを自分のためではなく、自分と同じ時間を生きる者たちへささやかにふるまうにやけたシェフのTV料理番組とはちがう。

『セントメリーのリボン』では、私の密かに愛してきた懐かしいバーボン、フォアローゼスやワイルドターキーが顔を出し、喉が鳴った。なかでも、わけありの美女にツーフィンガーのバーボンを勧めると、

「フォアローゼスね？」

「ああ」

「山のフィリップマールウね」

なんとたまらない会話ではないか。

院生の頃、S先生からバーボンの飲み方を教わった。ロ

ツクなどにせず、ショットグラスで生でやって、チェイサーする、それはそれは恰好よく見えた。確かオールドクロウという銘柄でしたね。

就職してから国分寺のスナックで見つけ、はじめてポトルに名を入れたフオアローゼスが好きだった。気取ったワイルドターキーもよかったけど。今はもう、すっかり飲みまなくなってしまうた。それでも一本だけ家の戸棚の片隅に後生大事に眠っている。

一良にはまって以来、ロスを舞台にしたレイモンド・チャンドラーに出てくるタフな探偵フィリップ・マローウをもう一度手に取ってみたくなった。山の猟犬探偵に対する海のフィリップ・マローウというわけ。またまた「タフでなければ生きていけない、優しくなければ生きていく資格がない」といった名台詞が二人の生き様として蘇える。

最後にハナの面倒をみる老人リチャード。カルフォルニアの匂い、そして第二次大戦での苦勞、確か日系人の苦勞話は『ダックコール』にもあった。四四二日系人部隊の話。それと収容所の話は表裏。あの収容所はデンバーだった。リチャードの作ったサンドイッチ(干しブドウ入りのかわいい黒パンにスモークしたカモ肉とチーズ)、熱い紅茶と冷えたプラムジュース。村上春樹のハムサンドとビールも

よく真似をしたけれど。こういう男の無骨な調理に強い憧れを感じる。

二〇年前に、ニューヨークに七カ月、デンバーに一カ月、カルフォルニアに二カ月、たまたまひとりであらうついていたあの頃の空気が、風が、匂いが強烈に思い出され、何となく同じ街角に佇んでいるような気分になるから不思議なものだ。

よい作家を教えてもらって感謝。これが親友の親友たる所以。でも一良は一九九四年に亡くなっているのですね。『ダックコール』が九一年。短すぎるけど、そこがまたいいでしょう。

一良の文に、「スポーツ選手は、選手生命の終わりとはほんとうの人生の終わりの二つを経験する」という一節がある。何となく大学人としての終わりりと人生の終わりりとを意識し出している私にはしみる言葉です。

おかげで、チャンドラーの『ロング・グッドバイ』を村上春樹の訳で読みなおす羽目にもなったわけだが。仕事を早めに切り上げ、「ギムレットには早すぎる」なんていうフィリップ・マローウの決め台詞を、どこかのバーでも一度、言ってみたい気分・・・

(平成二三年五月二八日)

### 年青りの冷や水

定年後、非常勤の仕事などしながら、それなりに自由を謳歌してきたが、ストレスのないことが逆にかすかなストレスになっていった。それでも二年目に入ると、なんとなくそれなりの生活のペースができてきた。

週に三回ほど、近くの運動クラブで、仕事前にスイミングにいく習慣が身につけてきた。早朝の水泳などまさに「年青りの冷や水」どころか、冷や水のなかにどっぷり身を置くわけではいささか乱暴な感じがしないわけでもない。「習い、性となる」とはよく言ったもので、最近はスイミング後のさわやかさが夕方までそこはかとなく続く。

二五mの短水路、ゆっくり三〇分からせいぜい四〇分、自分のペースで泳ぐだけのこと。問題は往復の回数が混乱することだけである。

疲れては元も子もないので、八〇〇mから一〇〇〇mと決めている。すると、往復一六回から二〇回ということになる。自分のためのエクササイズだから、回数がわからなくなるって少々いまいましいが、七か、八なら七回と少なめにカウントすることになっている。

昔から、余計なことを考えるのが得意な方なので、その内、一月、二月とカレンダーをめくるように泳ぐことにした。一二月までは実に楽しい。その月の花やら、行事やら、誕生日やら、一往復毎に思い出すことがたくさんある。しかし、一年目はよいが二年目に入るとどうも面白くない。

そこで最初の一年の六〇〇mが過ぎると今度は春夏秋冬に切り替える。一年を四往復で済ますわけ。この単位だと間違えない。記憶的にも体力的にもちょうどよいのだが、物足りない時はおまけの三年目に入る。最後の四往復はカウントダウン。余裕というわけでもないが、妙に泳法にこだわったり、肘の抜き方や、手首の入水角度など、いろいろ細かいところが気になってくる。止め時である。

打たせ水やジャグジー、ミストサウナなど、儀式のように一回りして、ジムを後に仕事に向かう。このペースが身につけてきたのである。それにジムでスイミング後に計る体重や血圧の測定も楽しい。結果がよくなければ、意識の外に押しやっ飛ばしまいがちなものであるが、これがすこぶる塩梅がいいのである。

血圧は健康のバロメーターともいわれるが、ここ数年飲んで降下剤も量を減らすどころか、しばらく止めてみましようかと主治医から言われるほどの好結果である。

よいことは重なる。長年、ことごとく失敗してきたダイエツトも、ついに究極の方法の発見に至る。ジャンルで言えば、レコーディング・ダイエツトなのだが、五〇グラム単位まで計れる体重計を買う。そこからが鍵。間違っても洗面所や脱衣所に置いてはいけない。生活の動線、つまり我が家で最もよく使う道筋、それが動線、私の場合は寝室と居間の間に置くことになる。

尾籠な話で恐縮だが、小水に立てば一五〇グラム、パンツを脱げば五〇グラムは減る。家で否応なく、否、いそいそと体重計に載るわけで、気がつく、無造作に手にしていた饅頭も「やめとこかな」とけなげな自制心が働く。

同じ精度の体重計がジムにもあって、スイミングの成果をさらに強調してくれるわけで、まさにドンドンよく鳴る法華の太鼓という次第である。冷や水転じて、幸せの重ね餅である。しかし、「好事魔多し」のことわざもあるのであまり浮かれないことにする。

(平成二三年三月二〇日)

\*年寄りの冷や水(諺)：江戸では、大川(隅田川)の水を買って飲む習慣があったが、抵抗力の弱った年寄りが、若者気取りで生水を飲むと腹を壊すことが語源で、老人が冷水を浴びるといった、老人に不相応な危険な行為や、差し出た言動をすることを戒める喩え。

### 多年草酒造 川柳品評会(平成二二年版)

親しい友人六名と「多年草」という名の川柳の勉強会を作った。まだ現役でがんばっている者もいるが、みな還暦を迎えている。交替で世話係を務めながら、毎月各人、自由題(雑詠)三句と世話係が決めたお題(題詠)三句を投句する。

それら雑詠一八句、題詠一八句から、自分の句を除き、それぞれ優秀(二点)二句、佳作(二点)二句、計八句を選句し、短評をつけて世話係に送る。世話係は、それらを高得点順に集計し、その結果を各自の評とともに知らせる。これらのやり取りはすべてインターネットで行われるが、時には句会と称して、某所に集まり、即興でお題を決めて一月を一日で楽しむこともないわけではない。六歌仙などと悦に入っているが、雪道をとぼとぼ歩く六地藏ならぬ六爺である。

師匠格の晃彦氏を中心に、額縁に入るような品格のある川柳創りを目指して精進に努めてはいるが、新人らしからぬ大活躍の利定氏を例外とすれば、ドングリの背比べ、いや最近はずかながら成長の跡も見られるので、シイノミ

の背比べである。

しかし、素人の悲しき、ダジャレや独りよがりの駄作も多く、玉よりも石ころまみれの、まさに塵も積もれば山となりつつある。かれこれ一年半、六〇〇句近くにもなり、お互いの琴線に触れ合った自画自賛の優秀作を酒の品評会に模して紹介する。

句の頭に冠してある(銘柄)は題詠名である。アルコール度は品評得点であるが、アルコール度六度未満は弊社の品質保証のため世に出さないことにした。ただし五度であつても四つの蔵元から推奨されたものに限って、今後の奨励のため推奨地酒として限定販売することにした。

### 特選大吟醸(アルコール度 一〇度 満点)

#### 我が家には前からいます仕分け人(利定)

一世を風靡した仕分けを詠んだ時世句だが、サラリーマン川柳の大賞作品もかくやと思われるほどの完成度の満点作品。

#### 礼儀知る孔子孟子はどこの人(一彦)

尖閣列島における中国漁船の衝突問題を詠んだ時世句。

「知る」よりも「説く」のほうがよいとの評もあつたが、礼儀を知らない某国を鋭く批判する意味ではこのほうがよいのでは。満点作品。

### 大吟醸(アルコール度 九度・八度)

#### 認知症進む母からしつかりね(利定)

「あなたは女の人に弱いから気をつけなさい」なんて、父と息子の区別もおぼつかなくなつた母からぼつんと言われた日のことを、しんみり思い出しました。

#### 取組は土俵の外に増えている(晃彦)

さまざまな不祥事の重なる角界。本業の土俵の外での暗闘が連日話題になる様子は、政治の世界でも同じかもわかものはスカート上げてズボン下げ(算男)

足さききれいなスカートはどんなに短くても様になるが、男の子の短足にだぶだぶズボン、あの腰。パンだけは許しがたい。

#### 初日の出本日限り天動説(利定)

なるほど、荘厳な初日の出。この時ばかりはしつかり大地に足を着けて天動説を信じるほうが自然。

#### (雪)雪合戦気になる人を選び投げ(斌)

好きな女の子のスカートをマクルいたずらっ子の心境。無邪気ななかにも男心の発露があります。そのうち無關心を装う高等な技を身につけるのですが。大人のセクハラも似た心理構造か・・・

(風) 魂も鯉も一緒に千の風 (一彦)

お墓でなく、千の風となつていつもそばにいてほしい人もだんだん増えてきました。空を見上げるとき、ふとこんな心境になります。

純米吟醸(アルコール度 七度・六度)

カミさんの無口になぜか動揺し (一彦)

男は沈黙に弱いものです。やましいことなんてなにもないのに・・・つい饒舌になってしまう自分が悲しい。

売れ行きに効いてしまった制動機 (晃彦)

米国でのトヨタ車批判を詠んだ時世句。シャレもここまで来るとさすが師匠、でも今の若い人は制動機ってなんのことかわかるかな。

うんちくを我慢して飲むビンテージ (算男)

大家の義太夫というのが落語にあります。あれさえなければもつとおいしいのだけれど。結構なワインを御馳

走になるのだから、我慢、我慢、我慢・・・母の日に感じる父の敗北感(斌)

父の日なんてつけたりですよ。デパートの作戦だ、なんてとうそぶきながらもどこか心待ちにしているパパ。女は強し、母はなお強し。

年寄りの元氣と老害紙一重(算男)

元氣すぎると迷惑かけるし、それに気づかないと空気読めないと言われるし、高齢化社会にも高度なソーシャルスキルが必要になります。

長寿国年金だけが生き続け (一彦)

一〇〇歳を超えるご老人の調査から、死んでも年金受給しているケースが少なからずあるという現実。長寿社会の怖さをよんだ時世句。

傘ふたつ出会ってひとつたたまれる (晃彦)

雨の日に、ビルの上階の窓から見ているようなイメージあふれる句。映画のシーンのようではありませんか。初詣今年こそが無い寂しさ(洋)

もうそんなに頑張らなくてもいいわけで、淡々とした感謝の世界もそれなりによいものではないですか。

道順を尋ねた人と歩く道 (晃彦)

どこにも親切な人っているものです。わざわざ間違え

ないようにと教えてついでに案内係り。一緒に写真に収

まったりして、縁は異なるものの味なもの。

あの人が好きだと言った色を着る (利定)

どこかになにか残るものなんです。こうして男は育っていくのです。あの人って誰なんて無粋なことは訊かないし、言わぬが花。

生まれても死んでも名前他人まかせ (晃彦)

これだけは本人が何か言う状況にはないわけで、人任せにするよりしやうがないわけで・・・今年こそ飲もうと書いて早五年 (晃彦)

毎年年賀状に同じ言葉書いています。「そのうち」は、やめたほうがいいと思います。思い立ったが吉日といえますからね。

本当はあなた相手の独り言 (利定)

気がつけば、無意識の中にもいつかあなたに語りかけている。ワ・タ・シ。これって反省ばかりしている夫の句ですか。

東京タワー川向こう見てしよんぼりと (洋)

ほんと二倍の高さだものね。長い間お疲れさまでした。何時か世代交替していくものなんです。スカイツリーしか知らない世代が始まるんですね。

駅広場福祉宣言塔褪せる (利定)

標語とか、宣言といったものは、ぜひそうしたい、なかなかできないから、あるんでしょうが・・・

人格者碁では殺しの好きな人 (晃彦)

どこかでバランスとっているのです。やさしい女性の乱暴な運転とか。百恵ちゃんの「プレイバック パート2」にもありました。古いねー。

国民がみな見飽きても機密です (晃彦)

情報時代の情報漏洩。政府はそれでも知らぬ、存ぜぬ。歴史が証明するとは言いながら、もう少しわかりやすい世の中がいいですね。

いち早く冬の訪れ便座から (洋)

日本の便座は素晴らしい。「この俺に温かいのは便座だけ」というサラ川の名句が思い出されます。

七光りわが子に欲しいひと光 (一彦)

政治家もタレントも、世の中は七光り流行り。就職難の時代なればこんな愚痴も出てしまう。

立ち回り舞台とビルでは大違い (斌)

深夜に歌舞伎役者の酒を飲んでのご乱行。おまけに謝罪会見での大根役者ぶり。芸は舞台の上でこそ映えます。(変化) 髪型の変化ぐらいは気付いてネ (利定)

亭主が床屋から帰っても何も気づかないくせに、カミさんが美容院から帰ってきた時何も言わなかったら大変です。

(麺) 定年後どうしてそばを打ちたがる (利定)

ほんと、どこに行っても蕎麦打ち自慢。蕎麦と野の花、雲の観察などは、定年後の定番メニューですね。

(一番) 負け惜しみナンバーワンよりオンリーワン(二彦)

歌の歌詞じゃありませんが、確かに何が何でもナンバーワンは息苦しい。でもオンリーワンも独りよがりだったりして・・・

(外国人) 邦人の中に増える異邦人 (晃彦)

ガイジンは放送禁止用語らしい。何でもカタカナが溢れる世の中に、美しい和語を求めるのも日本の文化とすれば川柳もですね。

(外国人) 潜んでる攘夷思想のDNA (利定)

ふだんはそうでもないけれど、何かトラブルがあったりするとすぐに外国人嫌いになったりする狭い心の自分がある。それぞれの歴史、文化をもっと学ばなくてはダメですね。

(皮肉) ユーモアと皮肉の境年の功 (一彦)

ことばはむずかしい。川柳だっってどこかに軽妙な洒落

(やさしさ) やさしさを素直に出せぬ不器用さ (一彦)

心配してつい余計なこと言い過ぎて喧嘩。あーあ、俺って不器用だな。でもその不器用さも実は計算づくだったりして・・・

(やさしさ) やさしさを好意とまちがえほぞをかむ(算男)

社交辞令も、本音も区別付かず。男ってうぬぼれの強い生き物です。冷たくされても、俺を意識してるからかなって、厄介ですね。

(麺) 定年後名人多しそば自慢 (洋)

これに似た句は多い。現役時代より生き生きしてるひとをみると、仕事に打ち込むものがなかったせいかななんて・・・

(麺) 旨い蕎麦ツユの助けがあつてこそ (晃彦)

どつぶりつけないでも、お前がいてこそ蕎麦は生きる。夫婦もそんな間柄なんですかね。人生深いですね。

(歩く) 母の手が雑踏歩く不安消す (利定)

マザコンといわれようと子どもはみんなそうなんです。特に男の子は。そんな母ももういない・・・

(歩く) 一步二歩とリハビリ重ね出る笑顔 (洋)

長嶋さんもそうだったのかな。支えあつての人生ですね。最後まで努力しなくっちゃいけませんね。

やひねりを入れようとすれば、それが品格を落としたり嫌味になる場合もある。やはり経験は亀の甲より年の功。

(皮肉) 皮肉だと後で気がつきむかつく夜 (算男)

後から、はたと膝を打つ。気づかなかった自分の益暗さに、悔しくて夜も目が冴えてしまう。

(再会) 再会もこれが最後がまた再会 (斌)

歳を取ると、またそのうちは禁句。すぐにまた会いたくなるもんですね。同窓会シンドロームなんて。

(水) あのかは水に流してクラス会 (利定)

若い時はいろいろなことありました。苦い思い出も。それも今ではなつかしい思い出。そのうち何のことかも思い出せなくなりませう。

(水) 水切りの音で伝わる妻の意志 (利定)

ボタンとドアを閉める音はわかりやすいが、水切りの音とは、誰にでも真似できる表現ではありません。夫婦にはいろいろな表現の仕方があるものです。

(変化) 変化球込めた思いは伝わらず (利定)

素直にど真ん中に直球投げられず、小技利かしてほめかしましたが、伝わらないんじゃないかと知らんぷり。でもそれが答なんです。

(歩く) 弟の歩く姿に父を見る (洋)

血は争えない。頭の禿げ方までソックリ。あなたお父さんにだんだん似てきたわよは、励ましじゃなくて、いじめに近い。

(雪) 雪化粧街のけがれを頬かぶる (一彦)

都会の美しさを感じるのはこんな時。東京砂漠だった年に何回かはこんなに変化。清純無垢な俺はどこに行っちゃまったんだ。

(雪) 湯けむりに雪が舞い込む隠れ宿 (晃彦)

隠れ宿というあたりに人生の年輪というか、経験の豊かさというか、重さがにじみ出ますね。単なる妄想だったりして・・・

(選) 選んでも離合集散好き勝手 (一彦)

選挙で選ばれたはずなのに、後は勝手気ままにくついたり離れたり。芸能人の恋愛模様じゃあるまいに。

(一番) 二番目の悲哀知らないエベレスト (晃彦)

そうなんです。誰かが一番になるということは後には悲しみの歴史があるのです。甲子園だっってそうでしょう。頂点に立つものはそのことも知らなくちゃね。

(時計) 定年後時計忘れてまあいいか (一彦)

いかに時間に縛られていた生活をしてたかを実感し

ます。解放されるとそれまで絶対必要だと思ってきたことが案外そうでもないことに気付かされます。

(皮肉) 皮肉言う彼の淋しさ目にあらわ (算男)

皮肉屋さんは結構ナイーブだったりして。攻撃は最大の防御ってこともある。言うほうよりも言われるほうが楽ということもままあります。

(まるい) 若いねえ四角い文字を丸く書く (晃彦)

四角いところを丸く掃く、の本歌取り。高等なバクリなうえに、「若いねえ」の口調がなんともいいですね。

推奨地酒 (アルコール度 五度、ただし四蔵元推奨)

鍋底を磨く楽しさ妻識らず (一彦)

台所は妻の主戦場。男の食彩もわかるけどそつと片隅でお手伝い。やがてひしひしとその喜びが込み上げてくる。妻の寝ている間に小人さんがせつせと働くのです。男ってかわいいいきものだね。

喉もとを過ぎればワクチンだけ残る (晃彦)

冬になると猛威をふるうインフルエンザ。あの騒ぎは何だったのか。気がつけば接種の優先順位に、世の中の必要度が示されており傷つきました。

脱ぎ捨てても脱ぎ捨てても残る罪 (晃彦)

師匠！ 重過ぎ、格好つけすぎ。罪なくば、何の己の浮世かな。字余り風ながら全体は十七文字。なるほど・

(選) 選択肢柔道野球芸能人 (算男)

神聖な選挙がただの人氣投票。代議士のレベルは選ぶ人のレベルだとすればなにもいえません。

(選) お互いに選ばれし者と思っている (利定)

お互いに尊重しあつていくことは大切だけれど、選ばれしといたつて誰から選ばれたの？

(一番) 井の中でボクが一番キミはビケ (洋)

井の中の蛙大海を知らずとはいいいながら、その小さな世界での悲喜交々がそのまま人生模様なのかもしれません。

(時計) 生真面目な電波時計のプレッシャー (一彦)

一秒も狂わない電波時計。それが標準になるとなんだか息苦しくなる。まじめ過ぎる電波時計より、巻き忘れると止まってしまう機械式時計のほうがなんだか人間くさくてホッとする。

(平成二三年一月二五日)